

糞線虫（ふんせんちゅう）—無視されてきた虫—

糞線虫は主に小腸に寄生する消化管寄生虫である。通常は軽い腹痛，軟便などを認めるのみであるが、免疫の低下した者においては，虫が増殖し，栄養不良、腸閉塞などを引き起こす。更に、重症になると全身に虫が移行し、肺炎、髄膜炎などを起こし死に至る場合もある。実際にわが国では医学会などで毎年5人程度の死亡例が報告されている。

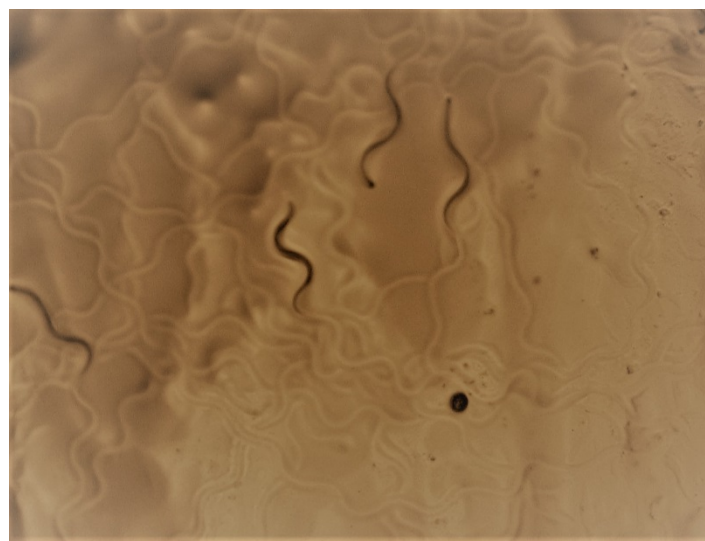
糞線虫は熱帯・亜熱帯に多く見られ、わが国では沖縄・奄美地方が流行地域である。衛生状態の改善した今日の沖縄では新規の感染は認められない。しかし、糞線虫は一旦体内に入ると数十年にわたり寄生し、治療を行わない限り治癒はしないため、衛生状態の悪い時代に生育した方ではしばしば感染が見られる。琉球大学医学部附属病院第1内科の最近の調査では沖縄県には今なお60歳以上では約2万5千人に糞線虫感染者が存在すると推定されている。

治療に関しては2015年にノーベル賞を受賞された大村智博士の開発したイベルメクチンが特効薬である。これまで我々はイベルメクチンで800名程度に治療を行っているが、軽症例ではほぼ副作用無く完治している。しかし、重症例では治療しても死に至る場合もある。我々は近年重症患者に対し、イベルメクチン連続内服を行い、救命に成功している。

ところで、糞線虫で死に至る原因で最も多いのは発見の遅れである。沖縄に多い成人T細胞性白血病ウイルスの感染者、免疫抑制剤を使用中の患者、抗癌剤を使用している患者の場合は重症化しやすい。このような方では治療前後に糞線虫検査を行うべきである。検査は便検査で行うが、当科で開発した普通寒天平板培地法が最も有用で、他法の10倍程度の検出力がある。

最後に、糞線虫は死に至る場合もあるが、早期に発見さえすれば治療は容易である。これまで、糞線虫は軽視されて見逃されてきた。今後は県民の皆様、行政と協力し、沖縄県から糞線虫を撲滅することをめざしたい。

（第一内科・平田哲生）



普通寒天平板培地上の糞線虫の幼虫

問い合わせは第一内科 電話098(895)1144まで。